

ちよひつづつ話

第五七号 重き心

三月ともなれば春の花が咲き始め、自然界の芽吹きに目を奪われるようになります。と共に我々の生活も季節の移り変わり、卒業、進級、又、職場の移動と心機一転を図る月であり、期待に希望を抱く月でもあります。又、亡くなられた御先祖にとっては、お彼岸を迎えます。日本の寺々では彼岸法要が厳修されます。例え分家であっても本家に繋がりのある先祖がみえるでしょう。一族としての繋がりに敬意を表したいものです。供養は字の如く、供えれば養われる。故に、先祖供養は御先祖の為でもあり、我が身の為でもあります。供養は往く魂と残る魂の深い関係です。

今年に成ってアルジ エリアでテロによる殺害、グアムでは無差別殺人、エジプトでは気球の爆発で死亡。誰しも何時・何処で不慮の災難に遭遇してしまうのか、予知能力の無い我等です。常に先祖に成る可能性を秘めた暮らしなのです。しかし死ねば即、先祖と成って供養をして頂けるのか頂けないのか。もちろん、残した財産の有無に関係無く。財産分与の事で激しく争い、兄弟は分裂し供養の対象から外されてしまった先祖もいます。我々の肉体には鬼が住んでいます。鬼が暴れ出す時、地獄の苦しみを味わう事になるのです。親が子に教えるのは物質依存でなく魂の伝承ができていますか如何かと言う事です。水は器によってその姿を変えますが水自体には形がありません。我々は水と同じように、縁によって生まれ、縁によって生活し、縁によって滅していくのです。万人生まれれば万人必ず死にます。ですがその死に様が、次の生き様に続いていくのだから大変です。亡くなられた方の命が次の世に、よりよい形で与えられるように努める事が先祖を敬う事であり、子孫を愛する事になると思います。ですから残された遺族は五十年間は追慕の感情を維持し、追慕の供養をして頂きたいのです。孟子も同じ様な事をいつてみえます。私も泥まみれに汚れた人生であっても、生まれた時の白い心、静かで穏やかな終焉を迎えたいと願っています。白は清浄無垢の証ですから。話は変わりますが今の社会は権利の主張と精神面の貧弱が相まって色々な問題を起しています。その昔、聖徳太子の時代は太子が制定されました十七条の憲法で充分社会生活をする上で問題がなかったのだと思います。それが人間の不都合から現在では一般の人間が読もうともしない、又、出来ないように膨大な法律になってしまいました。法に因って縛らなくてはまっとうな生活ができないという事でしょう。人間として恥ずかしい事態であり、悲しい事です。一例を挙げれば悪い事をする人間がいるから警察が必要になるわけです。世の中面白いもので、個々の判断が自己の防衛にかたより、それぞれが納得できなければ裁判に発展するのです。依り良い社会生活を営む為には家庭が重要です。家庭から生活のルールが始まるからです。ですから家庭で善と悪の判断が出来るように教育をしましょう。教育というのは教えた事が良く育ってこそ初めて実りがあります。格家庭が良くなれば社会は必然的に良くなる事でしょう。今や教育する立場の指導者が体罰を加えた事で大きな問題と成っています。須らく良く育てるとは如何すれば良いのか、良く考えてみましょう。

二十五年三月一日

善壽界善入院油掛地藏尊